慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	金石範著 『「在日」の思想』
Sub Title	Kim Suok-Puom, The Idea of "In-Japan"
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1983
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.56, No.10 (1983. 10) ,p.106- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19831028-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

金 石範 著
『「在日」の思想』

ひとが自立する、ための条件を探ることは、現在の私たちの知的状況にあつて、ほとんど唯一の課題であろう。というのは、まぎれもなく世界史の新しい位相としての戦後世界にあつて、西欧の近代理念によらざる自立性が、その〝新しさ〟を意義づけているからである。それはたとえば、生産力の点でのみ後進ではあるにしても、観念ないし価値体系の点で決して後進的であるとは思わせることのない第三世界の人びとの思念に明らかなところである。

その意味で、私たちの自立性を支えるものは、と問うかぎり、一人種、一民族、一言語といつた〝日本人〟性が、ためらいをまつたくもたずに、外国人研究者からも日本人研究者からも、あるいはまたとりわけ政治家たちによつても提出され、それを奇異としない、私たちの知的盲目性に、私はかねてから深い疑惑を抱いてきた。

この特殊一元的発想が、そしてその素朴な承認が、本質的に私たちを閉鎖しており、その閉鎖性が、これまたあらゆる意味で、私たちの排外・排他を突出させる契機をつくりだす。その意味で、私たちのナショナリズムは、戦前戦後を通じて、意識的であると無意識的であるとを問わず、内向けの、つまりはことばの真の意味での〝民族〟の突き詰めではなく、常に〝対外〟的にしか発動されない、という機縁をつくりだしている。たとえそれが、軍事力をともなつたものか、あるいは生産力を背景にもつたものであるかは別としてもである。

いかに愚鈍であれ、この一元民族神話を拒否することは、私たちの世代、つまりは敗戦によつて世界を知らねばならなかつた世代の必然であつた。しかし、この一元性神話は、いつかな突き崩す確たる手がかりを与えなかつた。天皇制国家にたいする戦後の格闘も、へたをすれば、この一元性を逆に析出してしまいかねない妖しさを破れなかつた憾みがある。それを人間の意相の多元性によつて立てなおすには、はかり知れない道程が望見された。

しかし、この戦後も、あるいは「何も忘れず、何も学ばず」の守旧主義者たちの国際緊張現実主義論によつて、ついには世界史的意義を喪なおうとしているかのようである。それは、戦後世界の幕をあけたはずの〝民主主義〟が東西対立——米ソ対立——によつて、案外簡単にもとのもくあみの国益至上主義になり落ちる、そこのところに便乗している。

だが、この便乗にもかかわらず、生命-生活を至上価値と据え抜いた意思の世界は牢固として抜けない支柱を、〝現実〟世界に打ちこんでいることを忘れてはなるまい。それはもしかすると、無秩序

の混沌に見えながらも、人間の可能性を歴史と読むことのできる唯一の手がかりではないのか。さすれば、この生命－生活の価値の根は、いったい人間のどこに、そして／あるいは人間の何に発見できるのか。

私の発見は、民族に据えられている。それは、しかし、既存国家の内実をそれと呼びならわした民族ではない。それは、〝生きること〟と一点においてすら矛盾することのない人間の集群でなければならない。これを、概念としての民族の読みかえと言うのであれば、それはそうとしても、対立の要素としてではなく、あるいは抗争の要因としてではなく、つまりは共生し共住することのできる、お互いに侵すことのない、自立的であるがゆえに主権的な人間の集群として、生命－生活をおのがじし包み込むものであるのにちがいない。

言いかえれば、その民族は、自己拡張・自己肥大の論理を内にはぐくむことがない、という意味で、文化的に自律的であるようなものである。私のこの想い方が、一元民族主義者に対抗して、多元的に社会を構成する原理として、この国で定立されるかどうかの確信に支えられている、とは言えない。だが、あえて私は、しかし、と言いたい。私たちの戦後は、いまだに前述した世界史的実験を放棄してはいないし、またそうすべきでもないからである。

私がここに紹介するのは、この私たちの中で、私なぞが及びもつかない思念で、〝私たち〟をつくろうと手を差しだしている、一つの創造なのである。それを私は、自分の無知のままに、ほとんど気づかないままで過ごしてきた、その無知を、いま少なくとも知らねばならぬ未知に転じようとしている。もちろん、それを私の〝知識〟として書きだそうとしているのではない。

※

著者金石範（キムソクボク）さんが、『鴉の死』（講談社）、『遺された遺産』（河出書房新社）、そして最近の『火山島』（文芸春秋社）にいたる文学作品や、『ことばの呪縛』（筑摩書房）、『口あるものは語れ』（筑摩書房）、そして『民族・ことば・文学』（創樹社）などの評論によつて知られた在日朝鮮人作家であることは、言うまでもなかろう。その底流をなしているものが、「在日朝鮮人が日本の社会に生きる」、そのことがらであることも、ことさらに言う必要はあるまい。そしてそのことがらは、一口に六〇万人といわれる在日朝鮮人すべてに共通していることも確かであり、金史良、金達寿、李恢成、金鶴永といつた作家たちや、歴史家姜在彦、詩人呉林俊などの作業と通底することもまちがいない。

だのに私が、著者によつてもつとも鮮烈に打ち据えられたのは、「この二十一世紀を展望する世界のなかの日本で、異民族が共存する道、その思想とはいかなるものであろうか。そういう考えが互いに深められるべきだとするのは、在日朝鮮人である私の僭越ないい分だろうか」（「あとがき」二四四ページ、傍点＝内山）と提示された、情念と理念の確実な建設的いとなみであり、また私たちの過去と現在にたいする怨念をやさしさにまで昇華しえた、その清冽さであつ

た。言いかえれば、「一つの事実認識とそれに対応する主体的な姿勢」（二四三ページ）の確立であつた。それを私たち在日日本人はどう受けるのか。受けることで何を創ろうとしているのか。たとえば、鶴見俊輔さんが、付章としてつけられた座談会「在日朝鮮人文学をめぐつて」で、次のようにそれを言い当てた。

「日本の中で、ここが韓国なのだ、ここが朝鮮なんだというふうに生きられる人間がたくさんでてきて、そういう態度をもつた人間にであうというのが、われわれにとつて自然のというか、自然のことというよりも、生き生きした体験になるような、そういう日本の伝統をつくらなければ、くり返えしくり返えし排他的な国家主義にもどつていく。それは日本人の問題なんです。それは在日朝鮮人の問題ではなくて、在日日本人の問題なんです。そこにくい違いがあるけれど、お互いに向きあう局面もあきらかにそこにある……。」（二三七ページ）

この提示と呼応は、政治学が政治のはじまりを、相互対立においてきたのとは根底的にちがつている。つまり、そこでの対立は、あるいは自己否定の契機をたとえ内包しているにしても、なお相手方の存在否定にまでゆきつくことを前提として承認するものである。しかし、ここでの状況は、むしろ対面であり、相互意識化であり、さらには自己尊厳化を発条とする相互的尊重のそれである。そこには自負と自恃はあるが、傲慢はありえないし、だからこそ支配－被支配（指導－被指導を含む）の契機が成立するはずがはない。

これは、私が参加革命以後に求めた人間の在りようを可能にする世界のはじまりを意味しているし、そこでの政治の在り方を宣明するものであるにちがいない。さらに言いかえれば、日本の戦後が、政治として見当てそこなつてきた人と人とのかかわり方の位相を、それは可能的現実態として重大に示唆するものではないのか。私は、在日朝鮮人を――そしてアイヌ人、沖縄人、被差別部落民、水俣病患者、三里塚農民などを――少数集団として区別し――その実は差別し――、その上で戦後民主主義に安住してきた日本人、そして／さらに、他にたいして民主主義のあたかも後見者であるかのように思いあがり振舞つてきた日本人を憎まねばならぬ。なぜなら、ここに提出された質の多元的な人間の存在を、つねに一元性の中に埋めつくして、彼らは私たちの安泰をことほいできたからである。

※　※

本書は既発表九篇の論文、前出の座談会、そして書下しの一篇「『在日』の思想」から構成されている。いきおい、私の追従は、後二者に力点がおかれる。それは、「座談会」での日本人の積極的受け入れと提示のし方と、そこで語られた著者の論脈が「『在日』の思想」に凝縮し展開されているからである。ここでは、著者の行論を追うことにする。

「近年『在日』の問題がかなり広く論議されるようになつた背景には、二、三世たちの日本生まれが七十万近い在日朝鮮人の八五％を占めるに至つた世代交替の進行、日本での定着

化、第二次大戦後三十余年にわたる、祖国分断の状況下の在日朝鮮人の生活と意識の変容がある。そして、それは二、三世たちを軸とする在日の若い世代の存在根拠の模索、アイデンティティの主張と重なるだろう。」（「あとがき」、二四三ページ）

だが、在日朝鮮人のこの情況にたいして、日本人は、「〝単一民族〟である日本民族への同化吸収が、帰化政策の理念」（二四四ページ）として定立し、「将来の日本では、在日朝鮮人が帰化日本人になることで消滅してしまうという青写真」をもち、「これが『国家百年の大計』で推進されている帰化政策の基本であり、日本国内における民族問題解決にたいする日本の国家権力の姿勢」として金さんには正しく確認されている。

在日朝鮮人の「在日」が決してその人たちの自発的意思によつたものでないことを、最初に定礎しておかねばならない。北・南アメリカやハワイ、あるいはカナダに移住した日本人の「在米」、「在伯」、「在加」とは異なり、朝鮮から彼らを剝奪した、その当の植民本国たる日本に「在」らねばならなかつた、その発端を思わねばならないのだ。この在日朝鮮人の歴史的形成過程が、しかしながら、今日の彼らの「在日」を唯一に問題化していると、著者自身が認識していないところに、「在日」問題の質がある。だからこそ、著者は〝在日の思想〟として、それを深化したのだつた。「『在日』の思想といつてもそこに一律的な原理があるわけでもない」のであり、「『在日』とは、『在日』していることは何であり、その『在日』を生きるというのは何か」と問うことは、実は、「そこに、たとえば在日朝鮮人組織が在日朝鮮人を抽象的に一括して示すような絶対的命題があるはずがない」ところで、「矛盾の集約した存在になりつつある在日朝鮮人の『在日』の状況から」（九ページ）発せられる問いにほかならない。しからば、その「在日の状況」とはいかなるものか。

すなわち、在日朝鮮人の世代交代であり、それは「無知で文盲でなにもわからないかしらないけれど、ともかく土着的な強さをもつて生きのびた」（一九八ページ）一世から、あるものから切られる存在がでてくる可能性、つまり「直接にへその緒が尾をひいて民族意識を注入してくれるわけではなくて、捉えようによつては真空のようなさらされたような状態が起りうる可能性」（二〇二ページ）を背負つた二、三世への交代である。したがつてそれは、日本を仮り住まいとするいわば臨時の腰かけ的な考え方と視点の転換をともなうことを余儀なくさせる。

そこで若い世代の問題意識は、生き方としての在日が同時に現実の生き方となる点にある。それはすなわち、「日本における異民族集団としての在日朝鮮人の存在性」（一〇ページ）、そのものが発する問いかけにちがいないのだ。この情態は、解放されても「祖国」に帰ることができないままに、この日本に住みつかねばならなかつたことがら、つまり《定着化》としての意識・生活基盤の変化にともなう在日朝鮮人の「変容」に結びついている。著者の表現をかりれば、定着化の在日の視点の創出である。

この視点は、実は戦後に日本共産党が、在日朝鮮人を日本の革命に組み込み、それへの献身を要求した際の観点としての「少数民族」を克服するモメンタムによつて形成されている。「当時の状況からして『少数民族』論と参政権問題は、在日朝鮮人が解放されたばかりの祖国に対して一定の距離を置くことになり、究極的には在日朝鮮人運動を戦前の同じく日本の革命運動に吸収する方向へ作用するもの」（一四ページ）だつたからである。

しかし、この日共に指導された状況を振り切り、そこに主体的創造を画定しようとしたとき、祖国や民族の過剰主張が突出したことは、「居住国での市民的権利取得の問題を等閑視」することになり、「一般的な意味での市民社会における市民的権利意識（納税義務などの見返りという意味だけではなく）の認識に怠慢があつた」（一四ページ、傍点＝内山）という反省をともなつてくる。つまり、あるがままに少数民族なのではなく、少数民族としての創造的転生がそこに予定されるのである。

この転生は、次のようにして、定着化の意味を確認することで確定される。「祖国が統一されてもなお『在日』が存在するという視点が必要だ。統一後も日本に残るのは統一朝鮮建設に大した役に立たぬような存在といつた棄民的な視点に立つのではなく、それこそ『在日』の立場から祖国統一に関与でき、その力を持つ意識集団として、在日朝鮮人の存在を予見せねばならぬのである。それは在日朝鮮人の定着化の現実も認め、その上でいまから『在日』の位置、『在日』その者の場を見定めて、統一へ向けてのかかわり合いを考えるということになるだろう。」（二二ページ、傍点＝内山）

ここまで在日朝鮮人が「在日」を見極めようと意識しているにもかかわらず、日本国家政策は、彼らの帰化を大前提とした、戦前の同化思想に立脚したままの状態にある。それは、内と外の区別に根ざしており、外を内に包絡することで同化し、少数集団の煙滅をはかる国内帝国主義とでも呼ぶべき原理の貫通である。その政策意図は、少数民族としての民族的異質性の存在が、当局にとつては、危険なそれであり、したがつて常に治安対策の対象として認識されているためにちがいない。戦前から、いや日韓併合以前にすでに民族として自立していた朝鮮民族が、植民地時代の三十数年間絶やさずに持続した民族性を、このような帰化政策によつて消滅させようとすること自体が、反人間的であるがゆえに反歴史的であることを、私たちは識りつくさねばならない。

日本社会への順応を否定するものではない、と著者は言う。だが、「順応するということは、その民族の独自性や集団の個別性を消したり捨てることではない。」（三二ページ）むしろ、その独自性や個別性を維持しながら、定着し定住することで、「祖国」と連接した異質性を含みこむことこそが、共存の思想として私たちに実り豊かに提示されているのだ。

※　※　※

著者はくり返えし「祖国」朝鮮を言う。つまり、祖国に帰属する点を接合点とした日本での〝定住外国人〟としての在日朝鮮人であ

る。したがつて、彼らの祖国は韓国でもなければ北朝鮮という〝政治的現実〟でもありえない。祖国とは、「幻想ではなく、この場合想像力をテコにして蘇つてくる対象なのである。」（四二ページ）「朝鮮」を祖国とするかぎり、在日朝鮮人は両義性をもつ。その場合、「両義性とは、祖国への帰属性とともに『在日』の位置からして日本社会への帰属性（この場合の帰属は、国や民族ではない、一般に日本に定住する外国人としての権利義務を前提にした個人の帰属意識）を持つという意味」（四〇ページ、傍点＝内山）である。さらに言うならば、次の指摘はそれをより明確にする。

「日本社会に定住する者として在日朝鮮人の主体を持つて『帰属』することが、一方で『在日』の位置を規定づけるだろう。そして、その『在日』の位置の持つ立地条件は祖国の南にも北にもないものである。その『在日』の位置が祖国と対応する。その対応のあり方が主動的であるとき、それはすぐれて創造的となるだろう。三十八度線を『国境』とした分断祖国を一つとして対応する位置にあり、『在日』が南と北を越えた統一へ向けての全体的な視点を持ちうるところに創造的な性格があるといえよう。」（四〇ページ、傍点＝内山）

このように、「在日」を思想化すればするほど、[著者には現在の負の位相が見えてくる。その一つは、先にもあげた日本の帰化政策を支えている、私たちの差別の構造である。在日朝鮮人からすれば、この差別は、彼らの民族意識そして自己確認の発条となりうる問題情況であろう。しかし、著者は、被差別者の意識までも凝視することで、〝思想〟の深化に施肥している。たとえば、差別・被差別の図式的思考は、「被差別者のほうは一般の人が持ち得ないような苦しみを伴つた緊張と同時に、自分が立つている相手を告発できる位置に甘んじやすい故に、つまり皮肉にも被差別であるが故に陥りやすい落し穴を自分で持つているのである。そして、この一種の落し穴は、相手に対するその告発の過程でやがて自ら掘りすすめて行くことになる堕落の穴と化しかねないだろう」（四四―五ページ）と、著者は仮借しない。したがつて、反差別のたたかいが「告発」の方法だけにとどまつている限りでは、被差別者のほんとうの自由と解放はないのだ、と著者は見つくしているのである。差別観の克服は、何よりも自立性にかかわつた、被差別者の側で発起すべき作業なのだ。「相手の意識をともに解放する、ともに自由に至るという立場、それは告発、糾弾ではなし得ない自己否定が必要であり、告発を越える新しい〝告発〟が必要なのである」（四三ページ）との著者の意識は、ことばの本来の意味での〝解放〟が、在日朝鮮人の自己解放による日本人の解放へと外延するところにまで拡がつて、そこに人間のありうべき姿を聳立させている。

※※※※

著者の立つ場は、一人の朝鮮人が〝思想〟を唯一の炬火として歴史の闇を照らしだす孤絶の作業場であるかもしれない。しかし、その〝孤絶〟は、氷の闇ではなく、限りなく人肌のぬくもりを他に感受させる空間でもあるにちがいない。だが、それは、いわゆる組織

に包絡されるたぐいの感傷的連帯を峻拒する質のきびしさに包まれている。既成組織が、著者を《民族虚無主義者》ときわめつけるのは、彼がみずからの文学・ことば・思考が、『『在日』という矛盾した特異な土壌から生まれた、一つの負性を担つている歴史的産物」（一六〇ページ）たることを知悉したところで、その負性を正に転倒する思想的営為が、どんなことをしても、「組織」になじむことのない、つまり命令－服従には含みこめないことを認識しているからである。

著者の「民族」は、組織が奉ずる政治的現実としてのそれぞれの韓国・北朝鮮にすぐさまつながるものでは、まつたくない。それは、著者が人間であろうとすること、そのこと以外のなにものでもないのだ。著者は座談会（前出）で次のようにそれを語つている。

「在日朝鮮人として日本の社会に生きるというよりも、現実にはそうですけれども、結局――そうですね、具体的には在日朝鮮人になるんですが、もつと抽象的な、人間一般、存在といつたもの。……在日朝鮮人、あるいは〝朝鮮〟という外皮をまとつた普遍的なもの。

というのは朝鮮人問題をふくめて、私の場合はもちろん朝鮮人であるということ、しかもちよつと左がかつた朝鮮人であるということは事実であるけれども、それでもつと抽象的にですね、人間はいかに現実を、人生を肯定して生きるかどうか。これは最大のもんなんです。これは朝鮮人とかは関係なしにある問題です。……民族、という形をとつて現われてくる普遍的なものを、ただ追求したいだけですし、宇宙があつて、地球があつて、人類が生存しつづけているのは、それは肯定しようが肯定しまいが、ともかく一つの厳然とした事実であるということ。とにかく事実を事実としてみる目を持つことができるかどうか。」（一九三ページ、傍点＝内山）

私たち「在日」日本人は、これほどに、戦後、普遍的なものとして〝民族〟を考えてきただろうか。このようなものとして、事実の民族が想定できたであろうか。戦前戦中のあの疑似観念であつた民族を実体化したと思いこんだ、その虚偽意識を払拭することに、私たちは余りも急でありすぎたがゆえに、新しい世界創造の主体としての民族の想定・創出に怠情であつた。しかも、その払拭が各種の改革や日本国憲法への寄りかかりで徹底できなかつたことをもつて、さまざまな残滓の存在を許してしまつた。そして、その残滓は、時を得て旧態を復元しつつある。

民族は、かくて私たちの現在を歴史の創造に結ぶ、連結環の位置にある。そして、その急務をになう私たちには、共存を申しでてくれている異質の人たちがいる。在日朝鮮人が、「在日」をかくも思想化する作業に挺身していることこそが、私たちに同時的・共時的な《思想の冒険》への旅立ちを慫慂する。しかも他方では、在米、在伯の「日本人」からの提起もある。（たとえば、前山隆が切り抜いた中尾熊喜の思想的創造のいとなみを見よ。『非相続者の精神史』御茶の水書房参照）

最初に指摘したように、私たちはこの日本を独占しているのでは

ない。また、今後そうすることは絶対にできない。それぞれが異質の人びとである集群によつて、共生する場であり、共住する空間であらねばならない。そうしたところで、明治以後はじめて、新たなる質と普遍性をもちうる、私たちの祖国が可能になるかもしれないのだ。それはまさしく、多元的な人間のすみ家であるにちがいない〝現実〟によるものでなければなるまい。

（筑摩書房・一九八一年刊・四六版二四五ページ・一五〇〇円）

内山　秀夫